

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00128

研究課題名(和文) 植民地台湾における日本伝統音楽の伝承と展開 - 昭和期(1926-1945)を中心に

研究課題名(英文) Dissemination and development of Japanese traditional musics in colonial Taiwan: focussing on the Showa period(1926-1945)

研究代表者

劉 麟玉 (LIU, Lin-Yu)

奈良教育大学・音楽教育講座・教授

研究者番号：40299350

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題を通して、第一に、植民地台湾における日本の伝統音楽の伝承について明らかにし、その成果を学会で発表するとともに、論文や記事にまとめ日本国内へ発信した。第二に、新聞や雑誌記事から収集した情報をデータベース化し、台湾中央研究院GISセンターの学術サイトを通じて発信した。第三に、これらの成果を台湾と韓国の研究者と共有するために、2つの国際コロキウムを英語で実施した。これにより、植民地朝鮮における日本の伝統音楽の伝承に関する比較研究の舞台が整い、国際的な議論が促進された。最終的に、研究代表者、研究分担者、研究協力者が4本の英語論文を台湾の学術誌の特集号に投稿した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題を取り扱う日本人・台湾人研究者がまだ少なく、研究成果もほとんど見当たらない。今までその歴史さえ意識しなかった日本人と台湾人も多いであろう。本研究成果を日台へ発信することによって、日本伝統音楽が台湾で伝承された歴史が認識される契機となり、その歴史の一部を補うことができる。また、韓国と台湾の研究協力者の研究成果を通して、植民地朝鮮と台湾という二つの「外地」における日本伝統音楽の伝承と文化的政策の異同も見えてきた。さらに、英語を用いて論文を執筆し、台湾の学会誌に投稿することによって、19世紀から20世紀にかけての東アジアの複雑な音楽様相を、台湾を含む外国の人々に伝えることができる。

研究成果の概要(英文)：Through this project, we first identified the spread of Japanese traditional music in colonial Taiwan and presented our results at an academic conference. We further conveyed these results to Japan via papers and articles. Secondly, the information collated from newspapers and magazine articles was compiled into a database and published through the academic website for the GIS Center at Taiwan's Academia Sinica. Thirdly, two international colloquiums were conducted in English to share these results with Taiwanese and Korean researchers. This set the stage for comparative research regarding the spread of Japanese traditional music in colonial Korea and it facilitated international discussion. Lastly, the research representative, co-investigators, and collaborators submitted four English papers to a Taiwanese academic journal, which will be published as a special issue.

研究分野：音楽学

キーワード：日本伝統音楽 植民地台湾 三曲 台湾神社祭 三味線音楽 箏曲 邦楽

1. 研究開始当初の背景

本研究の前段階として、平成 24 年度から 27 年度まで科学研究費基盤研究(C)の研究課題「日本伝統音楽の越境 植民地台湾における「邦楽」の伝承」(課題番号 15K02112)を行ってきた。この研究を着手した背景には、従来の植民地台湾の音楽文化研究のほとんどが、音楽教育の確立や、西洋音楽の普及および受容、大衆音楽の普及に焦点を当てたものであり、日本伝統音楽の存在が注目されてこなかったという状況があった。音楽教育や西洋音楽の受容に関する研究の視点は、従来の植民地研究の影響があったと考えられる。

植民地研究では近代化=西洋化の問題がよく議論される。また、ポストコロニアリズムのように、植民地の文化の抑制などについてもよく研究されている。近代化=西洋化の問題に関する先行研究が多いのは、宗主国が西欧圏の国である植民地支配が多かったからであろう。

他方、日本では明治維新以降、政治・社会制度が西洋化し、教育や音楽文化もそれに従って西洋化した。日本が植民地支配において現地に持ち込んだのは、日本の伝統的な文化ではなく、日本が受容・変容した西洋文化であった。また現地の人々を教育する方法として、西洋的な教育体制と学習内容を導入した。日本の大衆文化や伝統音楽も、庶民の生活の一部として台湾に導入されたが、それは台湾総督府の主導によるものではなく、台湾総督府の公文書にも記載がない。日本の伝統音楽が、これまで植民地台湾研究でほとんど言及されてこなかったのは、支配側の意図的な普及の対象ではなかったことが大きな理由であろう。

しかし、植民地台湾における音楽史は、西洋音楽の受容や、台湾漢民族の伝統音楽だけでなく、先住民の伝統音楽や日本伝統音楽も視野に入れて、それらの全貌が解明されるべきである。様々な音楽文化が 50 年の間に植民地台湾で発展した状況と歴史を明らかにするためには、研究者がジャンルの分け隔てなく研究対象とすることが重要である。特に日本の伝統音楽については、複数の経路によって台湾に導入され、当時、かなりの規模で台湾の日本人社会において伝承されており、その伝承と発展の内容は非常に複雑である。

これまでの 3 年間、研究グループは音楽史研究の初期段階として、日本内地と台湾の邦楽関係の雑誌や新聞記事に基づいて台湾における日本の伝統音楽に関する基礎データを収集した。具体的には、台湾で出版された邦楽総合誌『台湾邦楽界』および東京で発行された邦楽専門誌『三曲』の記事に基づき、台湾における伝統音楽の導入状況、台湾在住の伝統音楽の師匠の活動状況や、台湾での伝統音楽家による演奏活動状況、内地からの演奏家の演奏旅行の状況などを調査した。また台北で発行されていた日刊紙『台湾日日新報』の記事に基づき、ラジオ放送における伝統音楽の演奏状況および台湾神社の祭礼における日本伝統芸能の上演状況についても調査を行い、台湾において日本の伝統音楽が活発に演奏されていたこと、日本人だけでなく台湾人もその音楽を聴く機会があったことが確認できた。台北と台南の現地調査により、植民地台湾時代の演奏会場跡地を訪問し、両都市の都市設計の違いが日本伝統音楽の伝承状況に影響を与えていることも確認できた。このように植民地台湾における日本伝統音楽の大まかな状況を概観することはできたが、まだ課題は残されている。50 年間に伝承・展開された日本伝統音楽の歴史は多岐にわたり、また、新聞記事の内容が膨大で短期間ですべての記事を調べることは不可能であったため、まだ植民地台湾における日本伝統音楽活動の全貌を把握したとは言えない。特に昭和期の後半、日中戦争開戦後の状況については、さらなる研究が必要である。また台北・台南以外の重要な都市の活動状況の把握も必要である。加えて、史料からは読み取れない詳細を当時の台湾在住者の聞き取り調査で明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、植民地台湾における日本伝統音楽の伝承や展開の時期を絞り、昭和期を中心に調査する。昭和期は植民地支配の安定を獲得した時期であるが、日中戦争の開戦以降、台湾総督府により皇民化が推進され、メディアの統制が厳しくなる。このような安定期から徐々に戦争期に向かっていった昭和期において、日本の伝統音楽にある程度触れてきた台湾人と、台湾に在住した日本人の双方にとって日本伝統音楽はどのような存在であったのか、また、日中戦争の開始後、台湾人と日本人の音楽生活はどのように変化し、日本伝統音楽はどのような変革期においてどのような役割を持ち、その位置づけはどのようなものだったのかについて、史料調査だけでなく当時の植民地台湾で生活していた人への聞き取り調査も行うことで、その詳細を明らかにしたい。本研究の具体的な目的は以下の 4 点である。

目的(1)：日中戦争開戦以前とそれ以降の音楽状況の変化を、台湾在住者の演奏会、内地からの音楽家の訪問演奏会、ラジオ放送、台湾神社の祭礼、の 4 点に関して明らかにする。

目的(2)：植民地台湾時代を経験した台湾人への聞き取り調査を行い、当時の台湾人の日本伝統音楽に対する認識・意識について明らかにする。

目的(3)：地域や都市による音楽状況の違いを明らかにするために、演芸場の立地と台湾人および日本人コミュニティーの関わりについて調査する。

目的(4)：台湾研究者による植民地台湾時代の音楽研究成果を学び、本研究プロジェクトの研究成果を発表することで研究成果を共有し今後の研究発展に貢献する。

3. 研究の方法

- (1) 日刊紙『台湾日日新報』および芸能誌『台湾芸能と楽界』『台湾藝術新報』（『台湾邦楽界』の後続誌）等を調査
- (2) 聞き取り調査：植民地下に生活していた台湾人の訪問調査
- (3) 公会堂や演芸場、当時の日本人居住区の訪問調査
- (4) 台湾大学大学院音楽学研究所との国際コロキウム開催
- (5) 台湾中央研究院人文科学研究中心地理資訊科学專題中心（Center for GIS, RCHSS, Academia Sinica, Taiwan、以下は「中央研究院 CIS センター」）によるデータベースの公開

4. 研究成果

研究代表者と研究分担者の研究成果は以下の通りである。

(1) 劉麟玉（研究代表者）

1901年から1943年までの『台湾日日新報』に掲載された台湾神社祭の関連記事を調べ、音楽関連の余興のデータベースを作成し、そのデータベースの内容から43年にわたって開催されてきた台湾神社祭の余興の内容と傾向の変遷を把握することができた。また、台湾神社祭の余興に関わった検番の活動や芸妓が演奏した日本伝統音楽の内容についても調査を行った。芸妓の演奏空間が特設のステージでだけでなく、台北市内の街で山車と共に練り回ったため、その音楽が台北市内に住む台湾人も日本人も共有されたことが分かった。また、聞き取り調査に関して2019年に清華大学台湾文学所副教授石婉舜氏の日本語教師、呉滄瑜先生（故人）にインタビューし、2020年に台湾大学音楽学研究所副教授楊建章氏の親族にインタビューすることを果たした。当時の台湾神社祭についての記憶を尋ねたところ、インタビュイーが日本伝統音楽を聴いた記憶がないと回答した。実際、1930年代後半から1943年までの『台湾日日新報』の記事に照り合わせると、日中戦争の勃発以降、山車は自粛され、余興場のステージで演奏された音楽ジャンルは行進曲が多く、日本伝統音楽が台北市内で聞こえてくるような状況がなくなったことが確認できた。インタビュイーの証言はその裏付けであり、貴重なものである。

上記の研究成果について、まず、芸妓と台湾神社祭との関わりについての研究内容を2019年7月の東洋音楽学会定例会で「植民地時代の台北における検番の活動—台湾神社祭を焦点に」という題目で発表を行った。さらに、上記の内容に加え、台湾神社祭以外の検番の活動についても詳細に調査し、まとめた内容を“The role of *kenban* in disseminating Japanese music in Taiwan during the colonial period, with special reference to its relation to the festivals of Taiwan Shrine”として2020年2月に実施した国際コロキウム（オンライン開催）にて報告した。2021年度と2022年度はコロナ感染の状況の中で現地調査が困難であったが、昭和期の『台湾日日新報』を精査することができ、台湾神社祭の余興内容と時局の関わりを明らかにした論文“Japanese, Han, and Western music cultures coexisting in colonial Taiwan: A case study of the entertainments and its transition of the Taiwan Shrine Festival”をまとめた。その論文を台湾音楽学会機関誌『台湾音楽研究』特集号に投稿し、現在査読中である。さらに、2018年度に台湾現地調査を行った際、前述の清華大学石婉舜副教授の紹介により、台湾中央研究院CISセンターの研究副技師廖汝銘氏の協力を得ることができ、今までに作成した台湾神社祭余興のデータベースをはじめ、本研究分担者の研究成果を廖汝銘氏の制作により、中央研究院CISセンターが構築したサイトで公開することが可能となった。そのため、2022年度にデータベースの構成および説明文の執筆と翻訳に取り組んだ。サイトの公開は2023年8月を予定している。

(2) 徳丸吉彦（研究分担者）

台湾に対する日本の文化政策と教育政策の関係を調査し、新型コロナ以前の調査において、台湾で唱歌教育を受けた世代にインタビューを行い、明治期の唱歌教材が台湾にももたらされたことを確認した。また、台湾中部の彰化高等女学校（現在の国立彰化女子高級中学）の資料室での調査から、1940年に日本で行われた「紀元二千六百年記念行事」のために作曲された作品が、同女学校でも使われたことを確認した。また、予定されていた対面式の研究集会に代わって行われたオンライン会議に積極的に参加し、すでに提案していた枠組み（東アジアにおける儒教の役割、口頭で伝承される音楽よりも書記性で伝承される音楽への高い評価、音楽の折衷主義への容認）を、討論を通じて、より精密に論じることができた。これらは、目下査読を受けている英文論文、そして、日本語による解説「初代中尾都山の音楽性」（徳丸吉彦（監修）『人間国宝 野村峯山 初代中尾都山～都山流尺八楽の軌跡～』東京：日本アコースティックレコーズ、2022：6-13）にも反映されている。さらに英語の論文“Musical relationships between Japan and colonial Taiwan”を台湾音楽学会機関誌『台湾音楽研究』特集号に投稿している（査読中）。

黒澤隆朝原著、王櫻芬主編、王櫻芬・劉麟玉・許夏珮譯註『臺灣高砂族之音樂』（臺北：傳藝中心臺灣音樂館、2019）に、徳丸が英文で寄稿した序文も、植民地期台湾における重要な音楽活動を扱ったもので、本科学研究に関係するので、ページ数をここに記す（Foreword xvii-xxix、

(3) 小塩さとみ (研究分担者)

植民地台湾における日本音楽の活動状況について、三味線音楽の長唄を中心に、『台湾邦楽界』及び『台湾日日新報』の記事から、稽古場情報を整理するとともに、演奏会及びラジオ放送の記録を調査することで、台湾における長唄の状況を明らかにした。台湾在住の日本人にとって、理想となる演奏は東京や大阪など大都市のものであるが、台湾では内地に比べて長唄は「公的な娯楽」という性格を持っていた。演奏活動の中心は芸妓達であったが、素人の長唄愛好者も多く、温習会が演奏会の役割も担っていたこと、享受者は内地の師匠との強いつながりを有していたこと、ラジオ放送では台湾在住の演奏家の演奏が放送されるが、次第に内地からの中継放送が増え、しかし若者の「邦楽離れ」を嘆く声が出ていることが明らかになった。新作が好まれた三曲とは異なり、長唄愛好者は古典的なレパートリーを好む傾向が強いが、台湾独自の新作も何曲か作られた。中でも昭和8(1933)年に作曲された「長唄呉鳳」は、台湾全島で数回にわたり公演されている点で重要な作品である。その後、「長唄呉鳳」について、さらに調査を進めて具体的な作曲経緯やより詳細な演奏記録を明らかにするとともに、呉鳳伝説が植民地台湾でどのように扱われたかを調査し、長唄の他にもこの伝説を音楽作品化したものが多数存在することが明らかになった。

上記の研究成果について、まず、2019年7月の東洋音楽学会定例会で「植民地台湾における長唄の動向 『台湾日日新報』と『台湾邦楽界』のデータを中心に」というタイトルで基本的な長唄の活動状況について発表を行った。また、内地と植民地台湾の比較の視点を明確に打ち出す形で、2020年2月にオンラインで実施された国際コロキウムにおいて“Dissemination and development of *nagauta* in colonial-era Taiwan: Musicians, music teachers, performance venues, and new media.”を発表した。これらの発表に基づき「長唄呉鳳」と呉鳳伝説の音楽作品に関する調査結果を含める形で、台湾音楽学会機関誌『台湾音楽研究』特集号に論文“Musical Activities of Nagauta in Colonial Taiwan: Considering the Meaning of Nagauta Piece “Gohō (Wu Feng 呉鳳)”を投稿し、現在査読中である。また植民地における文化政策の視点を押し出す形で、Routledge社から刊行予定の論文集“Musical empire: Assimilation, appropriation, and autonomy in colonial Taiwan and Korea”に収録する論文を執筆中である。台湾中央研究院 GISセンターのサイトで公開されるデータベース「在臺日本傳統音樂演奏家(師匠一覽)」の説明文も執筆した。

(4) 福田千絵(平成30年度～令和2年度は研究分担者、令和3年度～令和4年度は研究協力者)

平成30(2018)年度は、邦楽雑誌『台湾邦楽界』及び『三曲』に加え『台湾日日新報』を用いることによって植民地台湾における三曲についてより広範囲のデータ収集が可能になった。また、台湾の国立彰化女子高級中学での調査において箏曲について新たな知見を得た。

令和元(2019)年度は、植民地台湾における三曲の動向を流派別に検討し、東洋音楽学会定例会で「植民地台湾における三曲の広がり—流派の動向から」(2019年7月)の発表を行った。また、前科研から継続していた演奏旅行研究の成果について、『比較日本学教育研究部門研究年報』に「邦楽家による植民地台湾への演奏旅行：尺八・地歌箏曲を中心に」(2020年3月)を発表した。

令和2(2020)年度は、国際コロキウムがオンラインで実施され、三曲組織の変遷について“The organizations of traditional Japanese music in colonial Taiwan: with a focus on *sankyoku*”を発表した。本コロキウムにより、海外研究者との交流が生まれ、研究の視野を広げることができた。

令和3(2021)年度は、引き続き三曲組織の変遷について研究を深め、共著書掲載の準備を始めた。また、『台湾日日新報』データベースの利用により、新聞記事の調査を深めることができた。その成果の一部として、台湾における尺八家の動向を検討し、『洗足論叢』に「植民地台湾における尺八家の活動—佐伯頼山と曾倅山を中心に—」(2022年3月)を発表した。

令和4(2022)年度は、日本伝統音楽演奏会及び日本伝統音楽家來台演奏旅行日程のデータベース及び解題を台湾中央研究院 GISセンターに掲載を準備した。また、台湾音楽学会機関誌『台湾音楽研究』特集号に、三曲演奏家の台湾訪問についての論考“Sankyoku concert tours in colonial Taiwan: The intersection of two thoughts.”を投稿した。また、Routledge社にて刊行予定の論文集“Musical empire: Assimilation, appropriation, and autonomy in colonial Taiwan and Korea”の一部として、三曲組織についての論考“Sankyoku Organizations in Colonial Taiwan: From Individual to Institutional Activities”を投稿した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 劉麟玉	4. 巻 32
2. 論文標題 Japanese, Han, and Western music cultures coexisting in colonial Taiwan: A case study of the entertainments and its transition of the Taiwan Shrine Festival	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 台湾音楽研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.29785/FJMR	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 徳丸吉彦	4. 巻 32
2. 論文標題 Musical relationships between Japan and colonial Taiwan	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 台湾音楽研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.29785/FJMR	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 小塩さとみ	4. 巻 32
2. 論文標題 Musical Activities of Nagauta in Colonial Taiwan: Considering the Meaning of Nagauta Piece "Goho (Wu Feng 呉鳳)"	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 台湾音楽研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.29785/FJMR	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 劉麟玉	4. 巻 60
2. 論文標題 研究発表：金志善「植民地朝鮮における日本人と日本音楽 新聞・ラジオ放送からみる普及・享受・展開」傍聴記	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋音楽学会東日本支部だより	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徳丸吉彦	4. 巻 45
2. 論文標題 Special talk 世界にある音楽を広く捉えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊 音楽鑑賞教育	6. 最初と最後の頁 4-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳丸吉彦	4. 巻 67(2)
2. 論文標題 国際音楽学会2021年グイード・アードラー賞受賞者特別講演：グイード・アードラー、音楽学、そして、音楽学の社会的役割	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音楽学	6. 最初と最後の頁 136-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田千絵	4. 巻 第16号
2. 論文標題 邦楽家による植民地台湾への演奏旅行ー尺八・地歌箏曲を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較日本学教育研究部門研究年報 第16号	6. 最初と最後の頁 138-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小塩さとみ	4. 巻 203
2. 論文標題 Traditional Music and World Music in Japanese School Education (日本学校教育中の伝統音楽及世界音楽)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 民俗曲藝 (Journal of Chinese Ritual, Theatre and Folklore)	6. 最初と最後の頁 73-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小塩さとみ; 大学みき子	4. 巻 54
2. 論文標題 教員養成大学における和楽器の指導に関する一考察: 専門科目「和楽器」における箏と、自主授業における三味線の取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 215-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徳丸吉彦	4. 巻 46-2
2. 論文標題 『音楽学と伝承現場の関係』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 科学技術と知の精神文化 講演録	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳丸吉彦	4. 巻 2月号
2. 論文標題 「日本の音楽文化はタコソボ型ではない」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『観世』	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件(うち招待講演 3件/うち国際学会 9件)

1. 発表者名 LIOU Lin-Yu
2. 発表標題 The role of "kenban" (検番) in circulating Japanese music around Taiwan during the colonial period, with special reference to its relation to the festivals of the Taiwan Shrine
3. 学会等名 The 2nd meeting of 2021 International Colloquium "Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TOKUMARU Yoshihiko
2. 発表標題 Influences of Japanese colonialism in music
3. 学会等名 The 2nd meeting of 2021 International Colloquium “Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 OSHIO Satomi
2. 発表標題 Dissemination and development of nagauta in colonial-era Taiwan: Musicians, music teachers, performance venues, and new media
3. 学会等名 The 2nd meeting of 2021 International Colloquium “Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 徳丸吉彦
2. 発表標題 グイード・アードラー賞受賞者特別講演：グイード・アードラー、音楽学、そして、音楽学の社会的役割
3. 学会等名 日本音楽学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 劉 麟玉
2. 発表標題 The role of kenban in disseminating Japanese music in Taiwan during the colonial period, with special reference to its relation to the festivals of Taiwan Shrine” (2020 version)
3. 学会等名 2021 International Colloquium “Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea” (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 徳丸吉彦
2. 発表標題 Summary for the Taiwan colloquium
3. 学会等名 2021 International Colloquium “Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea” (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小塩さとみ
2. 発表標題 Dissemination and development of nagauta in colonial-era Taiwan: Musicians, music teachers, performance venues, and new media
3. 学会等名 2021 International Colloquium “Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea” (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田千絵
2. 発表標題 The organizations of traditional Japanese music in colonial Taiwan: with a focus on sankyoku
3. 学会等名 2021 International Colloquium “Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea” (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 徳丸吉彦
2. 発表標題 『ものがたり日本音楽史』について
3. 学会等名 日本音楽学会東日本支部例会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田千絵
2. 発表標題 植民地台湾における三曲の広がりー流派の動向から
3. 学会等名 東洋音楽学会東日本支部第111回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小塩さとみ
2. 発表標題 植民地台湾における長唄の動向ー『台湾日日新報』と『台湾邦楽界』のデータを中心に
3. 学会等名 東洋音楽学会東日本支部第111回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 劉麟玉
2. 発表標題 植民地時代の台北における検番の活動 台湾神社祭を焦点に
3. 学会等名 東洋音楽学会東日本支部第111回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 LIOU, Lin-Yu (劉麟玉)
2. 発表標題 Evaluating learning motivation and experiences of junior high school students in music composing activities: Using the scale of Japanese nursery rhyme
3. 学会等名 The 12th APSMER (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 劉麟玉
2. 発表標題 植民地台湾における日本伝統音楽の展開
3. 学会等名 2019新劇論壇(台湾彰化县政府、彰化県文化局主催)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 国際高等研究所(分担執筆者 徳丸吉彦)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 国際高等研究所	5. 総ページ数 64
3. 書名 『「日本文化創出を考える」研究会 2021年度報告書』	

1. 著者名 徳丸吉彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 225
3. 書名 ものがたり日本音楽史	

1. 著者名 小塩さとみ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 88
3. 書名 フレーズで覚える三味線入門	

1. 著者名 徳丸吉彦(共著), 日本音楽教育学会(編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 248
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック	

1. 著者名 徳丸吉彦(共著), 齊藤忠彦;菅裕(編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 256
3. 書名 新版 中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法	

1. 著者名 黒澤隆朝著、王櫻芬;許夏珮;劉麟玉訳注	4. 発行年 2019年
2. 出版社 國立傳統藝術中心(台湾)	5. 総ページ数 710
3. 書名 臺灣高砂族之音樂	

1. 著者名 鷺田 清一編、徳丸吉彦(共著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 272
3. 書名 大正 = 歴史の踊り場とは何か 現代の起点を探る	

1. 著者名 日本音楽の教育と研究をつなぐ会編、徳丸 吉彦（監修）、小塩さとみ（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 128
3. 書名 唱歌で学ぶ日本音楽	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究成果の1つであるデータベースの作成について、2023年8月に台湾の中央研究院人社中心地理資訊中心（Center for GIS, RCHSS, Academia Sinica、以下は「中央研究院GISセンター」）よりアップロードされる予定である。URLは以下の通りである。

<http://map.net.tw/theater/music/>

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	徳丸 吉彦 (TOKUMARU Yoshihiko) (00017138)	聖徳大学・音楽学部・客員教授 (32517)	
研究分担者	福田 千絵 (FUKUDA Chie) (10345415)	お茶の水女子大学・グローバルリーダーシップ研究所 ・研究協力員 (12611)	2018-2020
研究分担者	小塩 さとみ (OSHIO Satomi) (70282902)	宮城教育大学・教育学部・教授 (11302)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	福田 千絵 (FUKUDA Chie)		2021-2022
研究協力者	廖 (三水+玄) 銘 (LIAO Syuan-Ming)		中央研究院 GISセンター研究副技師、研究成果データベースのサイトの製作者
研究協力者	山内 文登 (YAMAUCHI Fumitaka)		台湾大学音楽学研究所教授、コロキウム共同企画者
研究協力者	石 婉舜 (SHIH Wan-Shun)		清華大学台湾文学研究所副教授、研究成果データベースの共同研究者

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 The 2nd meeting of 2021 International Colloquium "Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 2021 International Colloquium "Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea"	開催年 2021年～2021年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域	国立台湾大学音楽学研究所	国立清華大学台湾文学所		
その他の国・地域	台湾中央研究院地理資訊科學研究專題中心(Center for GIS)			
韓国	Sookmyung Women's University	Hoseo University	Jeonbuk National University	